

帰国者の裁判を考える会

東京都港区新橋2・8・16新橋石田ビル4階 救援連絡センター 気付 電話03(3591)1301
郵便振替 00120121398834 「帰国者の裁判を考える会」 定価200円 年12回分 3000円

ザ・パスポート

74



1998年7月31日発行

74号『ザ・パスポート』の 見出しダッチューン!!

- 2 領置品ミニ集会報告 KO
3 「白くても赤ければ黒くなる」
偏向裁判を人民は許さない YW
4~7 丸岡さん
解放区
読者への手紙
丸岡裁判の今 その2
8~10 YW
ずっと瞑目心聞き入るも
終わりににっこり!
西山純さん地裁裁判傍聴記
11 社会人一年生 吉村さん
12~13 読者
レバノン旅行記①
14~17 M
「オスロ合意」は死んだか?!
18~19 M
在レバノン・米大使館に
ロケット砲攻撃!
20 HA
7. 18そばの会の
ビデオ会感想/会計報告

<見逃すな!>の
お知らせだよ〜ン!

SAI☆KAI
リアライズ'98
ミーティング

8月24日(月)
午後7時30分より
日本キリスト教会館4階で。

9月11日(金)には
東京地方裁判所へ行こう!

☆西川純さんの裁判
午前10時より 425法廷
☆浴田由紀子さんの裁判
午後1時30分より521法廷

7/11 領置品問題を 考えるミニ集会報告 (小村)

領置品規制対策会議(仮称)を中心に、本
会、統一獄中者組合、ゆきQ、支援連、爆取
に反対する会などに参加している人が集まり、
全国の拘置所・刑務所で問題となっている収
容者の領置品規制について考える集会が
7/11早稲田で行われた。参加者は約30名。

まず〇×式のクイズで参加者がどれだけこ
の問題を理解しているか試したあと、当局が
いう規制量が実際にはどの程度のものなのか
の実演、塀の内側で当局の放送を直接聞いた
吉村さんの報告、獄中、関連団体からのメッ
セージの紹介という内容で、9月に何か行動
を起こそうということでは終わった。

今回の意義は、本会などJRA・反口関係
の支援(本会がJRAの支援団体ということ
ではないが、これまで支援してきた顔ぶれか
らすると、ということ)と爆取に反対する会
など中核派系の支援とが一緒に行動を起こそ
うと決まったことにある。これまでなかった
ことだけに、これからこういった関係を大
切にしていきたい。

ところがそうであっても、「ここにきた顔
はほとんど知っていて、そこから先に進まな
い」という今回座長を務めた小田原紀雄さん
の発言が示すように、運動の狭さが浮き彫り
となった。非大衆的な問題をどうやって世間
に訴えていくか、これからの問題である。

◎今回は浴田さんは、休みで
でも体調は9割方回復
しているようです。
次回をよろしく!!

檄

「シロくても」赤ければクロくなる」 偏向裁判を人民は許さない

九岡修氏は、その有罪とされる「正当な証拠」の無いハイジャック事件「ドバイ事件」「ダッカ事件」の裁判で起訴され、地裁で無期懲役の判決を下されましたが、現在は闘病生活を送りながらも控訴審を最高裁に訴えています。

一九九五年の秋、高裁では弁護人証人・証拠調べはおろか被告人尋問すらも偏向分子による、一方的な「訴訟指揮」によって強制的に却下されました。これはまさに、思想的な異端者に対する「司法」の形をとった報復劇です。

これをそのまま看過してしまえば、体制に対して批判をとなえる者達は皆、「問答無用で処罰する」となどという排外主義的な司法に凋落しないとも限りません。これが戦後、「民主主義」政治を築き上げたという国での司法のあるべき姿でしょうか。

一九九七年、四月二十二日の高裁控訴審判決では、裁判長小林亮、裁判官山田利夫、和田隆史ら裁判所に巣喰う一連の反動偏向分子どもによって被告人九岡氏はその無実の主張を取りあげられることなく、不当極まる「控訴棄却」。判決、「無期懲役」と言い渡されたのでした。

反動偏向分子どもが「裁判官」の職権を濫用し、デッチ上げ目撃証言を採用したのはまったくの不当審理であり、その多くの証人に対して、検事が誘導尋問をするのを黙認したり、事実の彎曲解釈をして、まさしくデッチ上げた「不当証言」とも言えます。ところが九岡氏の同志、浴田由紀子さんの証言では人相からして、彼とはまったくの別人であることが判っています。

さらに、九岡氏がこれらの事件に参加していないと証明する他の目撃証言が、無実であることを裏づけているのです。しかし、反動偏向な観点しか持ち合わせない愚か者たちは、これら無実を立証する証言の全てを不採用としたのです。このように、思想的に異なる権力に対峙している「異端者（日本赤軍）」と、権力への迎合によってその構成員であることと犯罪者・犯罪予備群と見なすことは、公正な司法の立場と遠脱し、偏向した不当判決を出す恐れがあります。私たちは、権威ある最高裁判事の方々がそのような「人権無視の排除の論理」に従った誤った判決を下すことは、将来の社会に向けて大変な汚名を残すことだと考えます。

人々の心に、熱く正義の炎が燃えらうちは私たちも決して負けません。反動偏向分子どもに、一抹の良心の呵責と不安があるならばそれが歳を食うに従い増大するでしょう。けれども彼らが墓場に持っていかれるのは、残念ながら自らの「汚名」だけです。病身で心臓を患っている、無実の九岡氏を地裁、高裁、両判決は、不当な偏向審理によって「有罪」としました。

私たちは、無実の人間をみすみす偏向裁判で「抹殺」させるようなことは断じて許しません。これに抵抗する手段のひとつとして仲間たちと共に、最高裁判所究に「ハガキ作戦」を開始しました。これは、最高裁の判事たちに地裁や高裁判決での非合理性を直視してもらって、「目には目と、の報復裁判」でなく、憲法の理念のひとつである「基本的人権の尊重」に基づいて彼の無実を考えてもらうように、最高裁へ「上申書」としての「ハガキ送付」です。ぜひ皆様にも、ご協力お願いします。私たちは、九岡氏が自らの信念を死守しようとするように、私たちもまた、共に彼の無実を訴えていきます。

一九九八年 七月二十日 帰国者の裁判を考える会

解放区

1998. 7. 23

丸岡 修

「日本赤軍5・30声明」への意見あれこれ

73号に日本赤軍の声明が出ました。その前に朝日新聞が「ソフト路線に転換(5/27付刊)」などと記者の関心角度で報じたものだから、様々な受け止め方が生じています。

うパンフが出ていたが、高い値段で忘れた頃に出ていて、労働者の手には渡らない。姿を隠したままの情宣にどれほどの意味があるのか。「回路を持ち合わせていない」の一言ではくれないはずだ。> きついなあ…(丸)

1. 意見、批判、疑問

(1) 少し見直した (Aさん)

<「ヒューマニズムと民主主義」日本赤軍ソフト路線?、「国内の人々と出会う回路をもたない私達」と自分たちの立場を率直に表現している」とあり、私も少し驚きました。思い込みばかりで人間の現実を見抜けない者が政治をやっている人、と思っていたものですから。>

耳が痛い。(丸)

(2) 赤軍の国内状況に無自覚 (Bさん)

<(声明を人民新聞で読んだ)情勢の見方などに異議はないが、「国内の人々と出会う回路を持ちえない」ことに対する危機感をこの声明から感じることは出来ない。権力との関係で抽象的にしか言えないのだろうが、70年代からの国内の運動との問題を総括しきっているとは思えない。／丸岡氏がレバノンの5人拘束後に書いていた「国内に日本赤軍の公然合法部分の必要性」の問題提起に答えていないように見える。国内の状況をほとんど把握していないのではないか。／レバノン救援が登場の好機だったのについて公然合法部隊を登場させなかった。関西では、要は登場するだけの人が結局はいないのだろう、という話になっている。／情宣をU書舗などの第三者に昔から委ねたままである。なぜ小さくても自前の情宣をしないのか。『人民革命』とい

(3) 路線転換は残念

(大道寺将司さん・救済誌『キタコフシ』

75号より・東京都保谷市北町2-3-21畑勤)

<朝日によると、日本赤軍が「5・30声明」で、「ヒューマニズムと民主主義」という言葉を多用して新たなソフト路線を主張したとか。かつての闘いを自己批判しているようですが、とめどない感じですね。日本赤軍が日本国内の民衆とつながりあえないのは、アラブを拠点にしているからじゃないのかな? ソフトな路線に転換すれば民衆とつながりあえるというのは幻想でしょう。そして、ソフトに変わってしまったのなら、日本赤軍という組織名称は自家懂着じゃないだろうか。一友人というか、一ファンとして、ちょっと惜しいですね。> 誤解やで。(丸)

(4) 『噂の真相』8月号

『噂の真相』8月号に、「路線転換を囁かれるアラブ日本赤軍重信房子から本誌へのメッセージ」という編集部の取材・構成記事が出ています。「5・30声明」の主要部分を紹介しながら、背景などが解説されています。一般誌としては朝日新聞とは比べものにならないほど、よくできた解説記事です。

(5) その他

私にも声明への意見はありますが、次回に。

2. ヒューマニズムと 民主主義

朝日新聞は声明の最終章の一部分のみを取りあげたために、多くの人たちに誤解を与えています。今回は、時間と字数の制限があるので、「ヒューマニズムと民主主義」の点について書きます。

① ヒューマニズムは、「人道主義」ではなく「人間主義」を言う

英和辞典を見て下さい。日本では「人道」のイメージですが(その意味もある)、日本赤軍の言うヒューマニズムは、私がよく言う「人が人として人らしく共に生きる」の中の何よりも人間性、人間らしさを意味するものとしてあります。日本で一般的に通じる意味で表現しない日本赤軍が悪いのです。

拝金主義、拝物主義の資本主義社会に対して人間性を取り戻そう、人間を中心にした社会を創ろうということです。(もちろん人間中心だからとしても、「自然を支配する人間」とする発想からは卒業しておくべきです)

声明の中でこう述べています。

「21世紀を、拝金主義のアメリカ型グローバリズムから、人間主義に基づく、暮らしや環境に調和した共生社会へと結実させるため、人民参加の民主主義の徹底として実現して行こうではありませんか」。これがヒューマニズム。

② 民主主義の徹底は社会主義の土台

民主主義と社会主義は対立概念ではありません。民主主義には反動的側面と進歩的側面があります。反動的側面はいわゆるブルジョア民主主義的側面を言う。資本家の搾取の自由を無条件に決めた上で資本主義国家の支配形態としての不完全な民主主義においては、民主主義の重要な価値である労働者・人民の自由と平等を実現しえません。例えば今回の参院選、比例区の自民党は25%の得票率であり、投票率60%弱での自民党支持率はわずか15%にすぎないのに政権を担当しています。公的資金を投入して阪神大震災の被災者は支援せず、不良債権の銀行やゼネコンは救済します。衆院を自民党が過半数を握っているか

らこそその政権党ですが、先の衆院選比例区(96年)での自民党得票率は約35%、絶対得票率は20%余に過ぎません。資本家の利益を代表する政党に有利な議会制度。それを修正しようと名護市での住民投票を行ない、米軍海上ヘリポート基地の反対運動が多数派になると、自民党は先日の防衛庁長官久間のように「住民投票は議会制民主主義になじまない。衆愚政治だ」とのたまう。所沢高校の生徒、教師の多数決によって催されている入学・卒業式典に対して自民党や文部省は「民主主義のはき違え」とのたまう。

民主主義の徹底とは、民主主義を国家権力にとつての支配の道具から解放し、人民の自治を実体化させることを言います。そのことによって、民主主義のもう一つの側面、人民の自由と平等を実現する進歩的システムに転化します。

「社会主義は、次の二つの意味で、民主主義が無ければ不可能である。(一)プロレタリアートは、民主主義のための闘争によって社会主義革命の準備をしなければ、この革命を遂行することは出来ない。(二)勝利をおさめた社会主義は、民主主義を完全に実現しなければ、自分の勝利を維持し、人類を国家の死滅へ導いていくことが出来ない」

左翼知識人には承知の言ですが、誰の言葉だと思いますか。日本のマスコミに「民主主義の敵」と描かれているレーニンの言葉です。

(「マルクス主義の戯画と『帝国主義的経済主義』について」に書かれています)

③ 社会主義の基本的特徴とは、

徹底した民主主義と人民主権

武装闘争を展開するか否かは、情勢の客観的要求、人民の主体力量に左右される戦術的な問題であって、革命の中心課題ではありません。革命の中心課題は、暴力装置を持つ国家権力に対峙し、人民の革命を防衛し得る軍事力量を持っているか否かです。革命の平和的実現は人民の主体力量が十分に大きく現体制の国家権力が疲弊していれば、可能な時代にあります。

尚、私たちが民主主義の徹底を言い出したのは80年代初頭です。突然の「路線転換」ということではありません。

98. 7. 23 丸岡修

●一読者からの質問●

●答えます●●●●●●●●●●

敵との激烈な対峙の中では、全員を守るために個人の犠牲が必要なきときもあります。敵

の追撃を前線で受けている時は、本体の撤退を実現するために殿(しんがり)の部隊は玉砕を覚悟しなければならないことがあります。ここでの犠牲を覚悟しなければ全軍の壊滅をもたらしたり、戦局を敗北に導くこともあります。これ以上の犠牲を出さないために「降伏」を受け入れざるを得ない場合もあります

(降伏しなければ全員が壊滅する場合)。82年の戦争の時、PLOの南部指揮官はイスラエル軍の侵攻が始まった途端に前線部隊を全面撤退させたために、一挙にバイルートまで敵の侵攻を許してしまいました。あの時は、前線部隊を玉砕させても闘わせ、シリア軍を含めた全勢力の臨戦体制を整える時を稼ぐ必要があったのです。私もある同志が白色地区で失敗を犯した事件の時、その地区の者全員に害が及ぶとして地区全員の撤退を指示する誤りをやって本部から批判されたことがあります。攻撃体制を忘れて防衛的になってしまったために。この時は幸い、事無きを得た。

従って「個人を組織の為に犠牲にしない」という原則の上に犠牲を必要とする場合もあります。ですが、私の例はそれではありません。

ついでに余談。75年のクアラ闘争の時は遺言を残し同志たちもいますし、ダッカ闘争の前に参加同志たちは自分達の死についても討議していました(作戦は成功したが、戦士達は全員の死を覚悟していた)。つまり、6人を解放させるために5人は死を覚悟していたのです。72年のリッダ闘争の時には、最初から決死作戦でした(部隊自身による決断であってPFLPが指示したのではない。連合赤軍の同志殺害が無ければ決死作戦にはしなかった)。

本題からそれてしまいました。丸岡裁判での新証拠提供に向こうの同志達の協力を得られなかったのは、決して組織のために私を犠牲にしたものではありません。「自分の命に替えても同志は守る」というのが日本赤軍の立場です。

<前号の訂正・P. 21右段まん中；検察起訴に対して99.7%→検察起訴に対して有罪判決率は99.7%>

読者への手紙

98. 7. 23 丸岡修 

皆さん、暑中(残暑)お見舞い申し上げます。

今日も病舎。日々是療養。微熱傾向から平熱傾向(平熱の日が増えた)にあります。

1. 参院選。投票率が上がれば自民党に不利と思っていましたが、ここまでの惨敗は予想しませんでした。一先ず、万歳。が、自民党に替わるのが民主党では、少しマシでしかない。半歩前進。共産党の伸長は喜ばしいが、保守系支持者だけでなく、新左翼に対しても柔軟対応を望む。――次号で参院選分析と政権展望を述べます。

2. 日中共産党の関係修復は好ましい。国際共産主義運動の革命的再建が問われる。

3. 70号拙文を改めます。(P. 5)。乳酸飲料のヨーグリアンでもヨーグルトはできます。1回失敗したので乳酸菌が不活性化されているのかと思ったら、生きてた。ゆきちゃん、ごめん。

インフォメーション

◎ ひよりー

最近⑤のHさんから『ヨーグルトきのこ』

なるものをいただきました。
ヨーグルト菌で作ります! 知人にもすすめています。

みなさんも、よかったらもらって下さい。
{読者の} おいしいし体にいいですよ。

ほしい方は、ひよまで連絡を!

帰国者の会

『ずっと瞑目し 聞き入るも 終わりに ニッコリ!!』

西川純さん地裁裁判傍聴記

1998 7/14 w.

この裁判は、2回目の公判であったが私は初めてこの裁判の傍聴に参加した。傍聴者は前回のおなじみの仲間たち数名と、デカ3名、そして学生（男子）2名が傍聴に来ていた。

さて検察側の証人尋問だが、1977年9月28日当時、ハイジャックされた機内でパーサーとして乗り組んでいた証人の、イケスエ氏。『昭和44年日航入社。同47年からパーサー等を経て、国際便の客室マネージャーを勤めて現在に至っている』といった経歴の人である。『ハイジャックされたJAL472便は、ボンベイを出てインド洋上空で5名にハイジャックされた。彼らは、飛行機をバングラデッシュのダッカに着陸させてから、『我々は、日本赤軍（日高隊）である』と名乗った』と、証人による概要説明が行なわれ、検察側の尋問が更に詳細な内容に入っていく。

⑧「証人は10月2日（HJ後5日目）に解放されましたが、その間に脱出できましたか？……なぜ出来なかったのですか？」

証・「…監禁状態だったから」

⑨「解放されて後、事情聴取を受けたのは？」

証・「（検察庁から）2～3週間後という記憶」（昭和52.10.14作成 検察官調書）

⑩「ハイジャックの5名をどう区別しましたか」（ここで検事は5名をA～Eの符号で区別するようにして、それらの行動に記憶があるかを訪ねていた。特に『サブリーダー』と見なされるBと特定した人物の特徴を聞いていた）

証・「25～26歳、身長は160～165cmくらい。……そう見えた根拠として自分が180cmで目線が見下ろすようだったので…」顔の特徴は、面長、鼻高く、目はパッチリ、もっと言うとギョロツとした大きな目。口元は唇が若干厚かった…これは記憶ある。あごは短い感じ…これは印象を受けたということです。頭

にチロリアンハット。サングラス。覆面（マフラーみたいな物）、色は白とオレンジ色の混じった柄でマフラー状の覆面をしていた。花の上にかけるように口を覆面して、後ろに回して縛っていた。服装はグレーの背広上下。グレーという色は記憶が薄れているが、背広上下は、はっきり覚えている。手袋をしていた。持っていた物は手榴弾を左手に、拳銃を右手に。」「腰のベルトの所に弾を入れる弾倉をはさんでいた。ポケットが膨らんでいたのは覚えているが何が入っていたのかは解からない。犯人A～Eのなかで帽子はAとB。チロリアンハットはBのみ」

Bは、主に機内の前部のドア付近に位置していた。証人は、話を通すのに必ずサブリーダーのBを通じてリーダーと特定されるAにつないでいたのでBの声は聞いて覚えている。日本語と英語。B以外にAとCも英語を話していたがこれは上手い方だったようだ。証人は、Bの日本語に訛りはなく「普通の日本語」であると述べている。

ここで話を前に戻し、証人の陳述をもとに順を追って経過を述べる。

JAL472便は、朝方ボンベイを離陸。Bはスチュワーデスのイトウ・カエコさんと一緒に後部座席に座っていた。離陸後10分くらいで禁煙のサインが消えた頃、彼女が「あらっ」と言って異状を感じた。ファーストクラスとエコノミークラスの分かれている所に男が拳銃を持って立って、他4～5名の男がドタドタ…。操縦室のドアを開けて2～3名が入っていったのが見えたようだ。証人は、手を後ろに組まされ、機体の前の方に連れていかれた。この時、Eはエコノミー全体を威嚇するように拳銃を突きつけていたが、「止まれ、座れ」と言われて…証人は肘掛けに腰を下ろした。暫くしてからエコノミーの、前から3～4番目に座らされた。他の乗務員には「顔を見るな！下を向け！」とハイジャッカーたちが言っていたのが聞こえた。その後、機内放送。『この飛行機は、日本赤軍日高隊によってハイジャックされました。我々の命令に従えば、乗客の安全は保障します…』等のアナウンスが操縦席にいたAの声の特徴で流れた。証人も「威圧的な内容ではあったが、優

しいトーンのアナウンスであった」と感想を述べている。

そして機内に「インストラクション・ワン」と放送され、席替えが行なわれた。女性は窓際で男性が通路側。この時、証人はホールドアップ状態のままハイジャッカーの一人に「私が責任者のイクスエです」と述べた。また、別のハイジャッカーが来て、証人は彼に「乗客の生命と安全を保障するのなら服従する…」と言うと、「ウルセー、黙って従ってろ！言うことを聞けばいいんだ！」と言って彼は証人の後頭部を拳銃の握把の部分で殴り出血させた。しかしこの後、ハイジャッカーたちは自己批判して、全員それぞれ交互に、証人の所に謝りに来ている。

暫くするとまた「インストラクション・ツー」と放送され、乗客にパスポート、身分証、武器を通路へ出すよう指示があった。時計や筆記具も一時没収された。これらの物をエコノミー最前席のエジプト人女性に回収を命じていたが、この時は特に乗客たちは騒いだり拒否したりしなかった。

ハイジャッカーたちの配置について。証人によると、Aは（明確には認識できない）コクピット、他は客室に4名、Bの目立った行動は見えていない。各々役割が決まっているようだった。陳述で「Aはリーダーで主にコクピットにいました。Bはサブリーダーとして主にコーディネーター的役目。Cはファーストとエコノミーの間に位置。DはCと一緒に。Eは後部。それぞれ乗客の監視にまわっていました」彼らの装備について、「Aは拳銃のみ。その他は拳銃と手榴弾。全員、弾倉式（オートマチック）の拳銃を所持。Bの拳銃はルガータイプに見えました」と証人は述べた。

ダッカに着陸した後、機内はエアコンが効かず、ものすごい暑さに襲われる。この暑さで乗客はみんな我慢の限界に達していた。証人の話しによると、手に触れる吸殻入れが冷たくて心地よい！？と思うほど機内の熱気が強く、また自分の意識も朦朧としていたようだ。（そんな状態で、よく犯人らの声や行動をチェックできたと感心してしまう）乗客たちも我慢できず、騒ぎ出す者まで出てきた。『日高隊』はここで乗客の要望に出来るだけ

答えようとしてか、全員にアンケートをとっている。機内放送で「私たちはこれまでいくつもの誤りを犯してきた。…皆さんの忌憚らない意見を聞かせてほしい」等々。その後すぐに「乗客を代表して日本政府と話してもらいたい」とのアナウンス。証人のイクスエ氏が名乗り出たが認められず、JALパックのツアーコンダクター（男性）が指名された。2番目の指名はアメリカ人弁護士のカラビアン氏。彼は20分間くらい喋ったが、証人によると「通訳をやっていたBが相手の喋るフレーズを理解するのが大変そうだったので、途中から自分がメモを取って彼に渡してあげた…云々」と言っている。その後『日高隊』がアジ演説を2～3回行なった。「人質交換要求に対する反応が遅いのは日本政府が悪い…云々」といった内容（ずいぶん威勢のいい人たちだ）。

そして日本政府が要求をのんで、いざ『捕虜交換』の場面では「1時間ごとに6回に分けて交換する。釈放要求者1名に対して、乗客10名を解放する」と言っている。証人はこの際、BやCからドアの開閉操作をするように指示されたようだ。

「機内、第一次警戒体制！」の放送あり。証人は、「アナウンスしているところは見ていないが、声で(!) Bだとわかった」と述べた。どうして見てもないのにそんなことが言えるのか？証人は推測を述べている。

「左手に手榴弾、右手に拳銃、安全装置はずせ!」という放送が流れるや、Aはコクピットの扉の前に片膝ついて身構えて、Bはラウンジで、Cはファーストクラスの通路、DとEはエコノミークラスの通路にそれぞれ身構えて、ドアが開いたとき不意の外部からの敵の突入に備えていたようだ。証人は、Bの1mくらい横に位置していた。そして最初に人質交換で解放されて来たのが、大道寺あや子さんであった。そして、二次、三次と「警戒体制」とともに敵の「捕虜」と人質が交換されていき、六次まで行なわれた。

ここで検事が駄目押し（ちょっと誘導！ハイッテいる）気味に「…『警戒体制』の放送は6回ともBが放送したのですかあ？」

証人、「はあ、そのようだったです」(「です」

だっ!!今度は断定形かよ!!どうも証言が、前言のと違ってくると思いつつ、ここで傍聴席で騒ぎ出すと今後の公判傍聴人に迷惑をかける(規制が厳しくなって!)恐れがあるので私は静かにしていたのだが、そう考える仲間ばかりではなかったようだ。

なお、ダッカに降りてからは乗客に、食事と水の補給が外部からあったのは2回のみ。機内に搬入させるときには、「機内、警戒体制!!」「左手に手榴弾、右手に拳銃! (安全装置はしたまま)」という放送があったそうだ。この時、法廷では検事も裁判長も、『安全装置』と言えば拳銃のことのみか!と思っていたようだ。私が思うに「では、手榴弾はどうだったのか?この『安全装置』の“ピン”を『警戒体制』の時は抜かなかったのだろうか?」などと考えてしまうのだ。(手榴弾は、ピンを抜いてもレバーを握ったままならば信管に発火しない)

なお、外部との交渉に立った米国人、ガブリエル氏と弁護士のカラビアン氏は、証人のイケスエ氏と、この一件がきっかけで、その後もずっと親交が続いた。ガブリエル氏は5~6年前に脳梗塞で他界したが、カラビアン氏は現在カリフォルニア州ロサンゼルスに住んでいて、イケスエ氏とはずっと付き合いがあるそうだ。

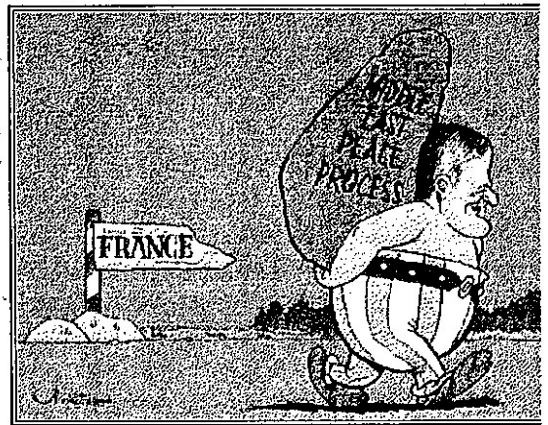
この公判中、西川氏はほとんど瞑目したような感じで証人の話を聞いていた。ただ、閉廷して傍聴者が外に出るときなど、知っている救援者に軽く微笑んだりしていた。私が見た印象では、物静かな人に感じた。

◎次回公判・9月11日(金)10時AM

東京地裁 425法廷

検察側尋問は、後30分程かかりそう!!
そして弁護側の反対尋問等あります。
今回も興味深い内容でしたが、次回は反対尋問がありますので、法廷傍聴に関心のある方は、ぜひ来てください。

★ 9月13日にイタリア・セリエA
ペルージャ VS エバートスで
中田がデビューする!!
という情報あります。



シリア外相 シハラが「和平」を
フランスへシフト変え!!
(デイリー・スターより)



1998年7月25日(土曜日) 雨、曇りのち雨

あと、6日。

我が班の班長さんが、10年勤めたこの会社を定年退職します。10年前にこの職に就いた時は、「女か! まあ、便所掃除くらいだな」と言われて雇われたそうで、以来、この道一筋。真面目に、せっせと働いてきて、まだ十分やれるのに、「定年だから」。勤務歴6カ月の私などより、はるかに経験と智慧に満ちた班長さんなのですが。私が清掃会社の社長なら、班長さんには残って貰って、後輩の指導に当たって貰いたいものだと考えます。私は思います。

身体が小さくて、年も重ねていますが、実に努力する人なのです。彼女が担当しているトイレと私のトイレを比較すれば、一目瞭然。彼女の指示に従っていれば、大丈夫という安心感がありました。この人なら、どの職に就いても、きつとしっかりやれたらと思う。おまけに、彼女はまだ働きたがっています。働かねばならない経済事情があるのでしょうか。働きたいのに、職がない。今の日本では、「それって、ありふれてない?」です。真面目に働き通しても、まだ、安心して生活できないとは、何と貧しい社会なのだろうかと思わずにはいられません。

職場での気になる人々。まず、20年以上も勤務したというおばあさんのOさん。年齢こそ、我が班長より数年若いのですが、肉体は大変衰えています。傍目にも、しんどそうで、毎日彼女を見るのが辛い気がします。神経性の胃炎を患い、白内障を患い、数年前に脳血栓が何かを患って以来血行を促進する薬を欠かせないそうで、何と、毎日7種類の錠剤を服用しています。階段を登るのすらしんどそうで、「これで、仕事ができるのだろうか?」と不安になります。実際、時々彼女と一緒に仕事する時がありますが、半人前の私から見ても、随分と仕事にならないように見受けられます。痛々しいくらい努力しても、身体がついていけないという有り様です。そして、時には、「定年まで勤められそうもないよ」と漏らします。しかし、彼女は、毎朝やってきて、毎日、仕事場に向かいます。彼女の健康は、掃除に明け暮れた20年以上の年月ですり減ったのではないのでしょうか? 彼女は働く以外生きる道がないのでしょうか。さもなかったら、とっくの昔に退職して、晴耕雨読の生活でもできるはずですから。

私が理解できないのは、我が班長がこのOさんに手厳しいことです。勿論、面と向かってずけずけ批判するということはないのですが、どうも、班長にしたら、このOさんが20年以上の経験を持ちながら、後輩をきちんと指導していないこと、身体が動かないのに口だけ達者だというのが腹に据えかねるらしいのです。が、Oさんにしたら、できるだけことはしているのでしょうし、自分の身体を動かすだけで精一杯なのではないか、と

身体も小さく、恐らくこれといった資格もないからこそ、掃除で生計を立ててきた似たような境遇なのでしょうに、相互にシンパシーを感じないという関係があり、何とかできないものかとやきもきしてきました。しかし、あと、6日間で、班長は退職します。働けるのに退職しなくてはならない人、働ける健康状態ではないように見えるのに、定年に達しないので無理して勤める人。

年老いた母の姿がだぶります。一生働き尽くめで、まだ老後が安心できない生活とは、本当に不安なものでしょう。かく言う私も、「健康が一番だよ」という班長の言葉を胸に刻んで、毎日汗を流しています。

追伸: ①今日は、勤め始めて6カ月め。ここまでやれたのは、一重に、この班長さん、班の仲間のおかげだと思います。班には、4月から新しい人も加わっていますし、班長の後を担当することになっています。更に新しい人が入ってくるらしいです。一応、班の中堅になる訳で、班長さんが教えてくれたように、班の仲間を大事にして、働こうと考えています。

②お便りを下さった方へ: 掃除仲間の労働組合を作らないかということですが、まだ、それだけの力があるとは思いません。何しろ、日本に慣れるのに、最低1年はかかると思っています。話は、それからでしょう。今は、とにかく、働いて頑張ることに徹したいと考えています。ここで頑張れなかったら、何処へ行ってもやれないと思って続いているところです。社会的リハビリを続けな

レバノン旅行記①

夏原 得熱斗

もう1年近く前のことになるが97年9月、僕はレバノンへ行った。以前からレバノンがどういう所なのか自分の目で見てみたいと思っていた。行きたかった理由はそれだけである。パスポート読者には物足りないかもしれないがこれは1旅行者の単なる旅行記である。

ベイルート空港に着いたのは夜中の2時すぎ。飛行機のクラブを降りると、銃を持った警備の兵士がいる。…そういう所へ来たのだという実感がわいてきた。イスラエルは相変わらず断続的にレバノン南部を爆撃してるし、8月末にはベイルート市内で車に仕掛けられた爆弾が爆発したと新聞に載っていた。

会社とかで「レバノンへ行く」と言った時の反応は「地雷踏まないようにね」というのはまだレバノンについて少なからず知っている(?)方で、「レバノンって国の名前?」とか「東南アジアだけ?」とか言われた。とにかく、危険なというか危険な状況になる可能性が少なくない所へ行くのだというそれなりの覚悟をして、僕はレバノンにやってきた。

夜中なので真っ暗だが、降り立った空港から見える山々の斜面には数多くの明かりが見える。空港内の移動バスに乗って明かりを見ながら、ここがかつて浴田さん、丸岡さん、吉村さん達がいたレバノンなのかと思った。

さて、無事税関を通過するとタクシーの客引きが「どこまで行く?」と声をかけてくる。こんな時間にバスなんか走っていないのでタクシーに乗るしかない。「ハムラ通りまでいくら?」と聞くと、「2.5\$」と、予想通りふっかけてきた。ガイドブックによると、空港―ハムラ通りは約7km、夜間タクシー代の相場は10\$と書いてあった。さらに「どこのホテルだ?」と言う。「予約してない、安いホテル知らないか?」と聞くと、「いくらだ」と言うのでいくらぐらいのホテルを探すのかという意味かと思い15\$と答えた。そしたら「OK, 15\$, カモン」と言っている。「安いホテルを知ってるのか?」と聞いたら「NO」と言う。どうやら、いくらと聞いてきたのはタクシー代のことらしい。しかし長時間のフライトで疲れていて、ここで長々と交渉する気はないので一緒にホテル探しをしてくれる事を条件で乗ることにした。

ハムラ通りへは10分程で着いたものの安いホテルは見つからず、通り周辺をグルグル回ったあげく今日のところはしょーがないと、運転手の知り合いのホテルで45\$を40\$にまけてもらい1泊だけすることにした。

2日目―青い地中海と青い空

昼前に起きてホテル探しに出た。ガイドブックによると、ハムラ通りで1番安いらしい昨夜来た時は閉まっていたムーンライトホテルに行ってみた。値段を聞くと本に載ってる通りの1泊20\$で、もちろんTVもエアコンもないが部屋は思ったよりきれいなので泊まることにした。後で何軒か他のホテルも見したが、やはりここが1番安いようだ。

部屋に荷物を置き海の方へ散歩に出掛けた。海岸通りに出てみて、自分自身がレバノンに対して勝手な思い込みをしていたことに気づかされた。”自由”なのである。”自由”という表現は適切ではないかも知れないが、僕はそう感じた。別の言い方をすれば”開放的”と言った方が近いかも知れない。若者がローラースケートをしていたり、ラジカセで音楽をガンガンかけていたり、なによりも女性がノースリーブやヘソ出しルックで歩いているのである。ここがアメリカの西海岸あたりだったら別に驚かないが、ここはアラブ(イスラム圏)なのである。知ってる通りイスラム教では女性は肌や体の線を出すことはよくないとされている。僕は以前エジプトへ行ったことがあるのだが、女性の半数以上は暑い中チャドルで全身を覆っていた。観光地のエジプトでさえそうなのだからレバノンは…と勝手に思い込んでいたのだが、やはり何事も自分の目で見てみるものである。その一方、さらに海岸通りを歩くとシリア軍の検問所があって、カメラを向けると、やめろと手で合図された。

ローラースケートやヘソ出しルックと兵士の姿、そして一面に広がる青い地中海と青い空、そうそうこんな風景の所はないだろう。

うだる程の暑さでもないが、地中海からの強い照り返しの中、目的もなくぼっつき歩いているとさすがに疲れたてきたのでハムラ通りに戻った。ハムラ通りは人や車が少なく、ほとんどの店が閉まっていた閑散としているのである。レバノン1の繁華街ってこんなものなのかと物足りなく感じていたが、翌日になってその理由がわかった。今日は日曜日だからである。

3日目―難民キャンプ

昨日とはうって変わって喧噪のハムラ通りである。車のクラクションが絶え間なく鳴り響き、昨日閉まっていた店も営業している。

日本円を両替した。100円が1100レバノンポンド(£)。ちなみに1\$は1600£だ。レバノンの人達は自国の通貨レバノンポンドをレバニーズと言うが、レバノン人のこともレバニーズと言う。

レバノンにも少し慣れてきたところでこの旅の1つの目的であるパレスチナ難民キャンプへと出掛けた。もちろんガイドブックには載っていないが大体の場所はわかっているので、とりあえずハムラ通りから途中の国立博物館まではバスに乗った。ベイルートの中心部を少し離れると壊れたままのビルや壁に多くの銃弾の跡がある建物が目立ってくる。復興中なのは中心部だけなのだ。

改築中の国立博物館の前でセルビスを拾った。セルビスとは乗り合いタクシーの事で、車を停め運転

手に目的地を告げる、同じ方向だったら乗り込んで目的地に着いたら乗った距離に相当する料金を払って降りる。助手席に2人乗れば、後部座席の3人と合わせ最大で5人乗れる。ガイドブックには乗ってからすぐ料金を払うのがスマートな乗り方だと書いてあったが、そのようにしたら運転手が払ったことを忘れていてもう1度請求されたことがあったので降りる時に払った方がよい。僕はレバノン滞在中、初日深夜の空港から乗ったタクシー以外はバスかセルビスしか乗らなかった。

運転手にサブラ・シャティーラキャンプへ行きたいと言うと、あっさり、「乗れ」と言われたので乗った。10分程で着いてしまい運転手に「サブラかシャティーラかどちらだ」と聞かれたので、どちらでもよかったのだからとりあえず「サブラ」と答え、「オフィスへ行きたいんだ」と言った。どこからがキャンプの入り口なのか、どこがサブラとシャティーラの境界かもわからず運転手は周りの人達に聞きながらセルビスは人でごった返しているキャンプ内をウロウロ動き回り、少し割高の5000を払って降りてもらったのは病院の前だった。実は家で余っているノート数冊と筆記用具を子供達に使ってもらおうと日本から持って来ていてそれを届けるついでにキャンプ内の見学でも出来ればと思い、ここへやって来たのだ。病院の人に学校まで案内してもらい、事務室のような部屋に通された。日本から来た旨を伝え、もって来た物を先生に渡したが「ここには1000人の生徒がいる。これだけもらってもぞ」という対応だった。確かに僕の認識不足だった。キャンプ自体こんなにたくさんの方がいるとは思わなかったし、学校といったものもせいぜい数十人程度だと思っていた。せっかく日本から持ってきたものなのでと受け取ってもらい、学校をあとにしてキャンプ内を歩いた。

ここは完全に独立した自治地域として機能していて、病院や学校だけでなく食料品店から雑貨屋までいろいろな店が立ち並んでいる。歩いているとみんながハローとか元気？とか話しかけてくる。

子供に話しかけられ音楽テープ屋に連れていかれた。何か買えとすすめられた訳ではなく、その店で僕は入れ替わり立ち代わり入ってくるいろんな人に質問攻めにあつたのだった。どこから来た、年はいくつ、今までどこの国へ行った、何故レバノンに来た、etc. …といった感じで。

その店から正面に見える向かい側に大きな空間がある。野球のグラウンド2個ぐらいの広さが瓦礫の山になっていて、その中にアパートのような建物が1つだけ残っていて、こちら側に建物の断面図を見せつけるかのように建物の側面がなく、部屋の中が丸見えになっている。そしてそこで人が生活しているのである。僕がその建物を指さすと、店にいる人は「ネタニヤフ」と言って首を掻く切草をした。イスラエルの爆撃でやられたという意味だろう。

1時間ぐらいその店にいたのだろうか、その後もキャンプ内を歩き続けていると子供達が「あっち、あっち」と指をさしているのをそちらを見ると日本人の1団がワゴン車に乗り込むところで、その中にフォトジャーナリストの広河隆一さんがいた。日本でレバノン大使館へビザ申請に行った時、広河さんの事

務所の人と一緒に僕と同じ時期に広河さんたちパレスチナの里親運動をやっている人何人かがレバノンへ行く事は知っていたので、どこかで会うこともあるかも知れないとは思っていたが、こんなところで会うとは思わなかった。もっとも、会うと言っても面識がある訳ではないので広河さんたちは僕の事など知らないのだが…。

広河さん達には泊まっているホテルを教えてもらい、僕はそのあともしばらくキャンプをウロウロしてから帰った。夜、広河さん達の泊まっているホテルへ行き少し話をした。広河さんによると、普通キャンプの中にアポイントなしで入る事は出来ないらしく、広河さん達も紹介状をもらってそれを見せて入ったらしい。しかもキャンプ内で写真を撮ったりする事も広河さんでさえもあまりやらないそうで、撮る時も断ってから撮っているらしい。昔、日本人でスパイと間違えられてガソリンをかけられ焼き殺された人もいるとかで、それは極端な例にしても1人を入れたという事はかなりラッキーだと思った方がよいと言われた。僕自身もセルビスであっけなく入れた事に驚いていたのだが、知らないという事はコワイ事である。

(次号へ続く)

<編集部Mより>

一読者から「レバノン旅行記」の投稿を頂きました。ありがとうございます。さて、「夏原さん」が訪れたベイルート郊外の「サブラ・シャティーラ」キャンプは、サブラとシャティーラが隣り合い、ベイルートにある3つのパレスチナ人キャンプ(他2つはマレリアス、ブルジバラジネ)の中で最大。1982年の大虐殺は読者の皆さんも書籍等でご存知だろうと思います。

現在の「和平」会議、パレスチナ・イスラエル会議では、これらレバノンのキャンプに生活している35万人と言われるパレスチナ人の帰還問題は対議のテーブルには上らない。そのほとんどが1948年の難民であるからだ。

「パレスチナ」 広河隆一著 岩波新書

「中東 共存への道」 広河隆一著 岩波新書

「ベイルート 1982年夏」 至徳房子著

読の特集

パレスチナ・中東について学習してみたい方へ

上記3冊をお勧め致します。お盆休みにでも是非。

「オスロ合意」は 死んだか？！

98. 7. 26 M

ポスト湾岸戦争の対中東政策立案者とされる米国国務省マーティン・インディックは6月17日、『**「和平は非常に危険な状況に置かれている」と幾度も繰り返した！**』

(6. 18CNNニュースより)

中東の「和平」を巡る報道は日本に於いて必ず米国のフィルターを通過して伝えられる。

先日のシリア大統領アサドの22年来、初のフランス訪問に際し、「シリアはイスラエルとの戦争準備を行なっている！」と挑発し、尚かつ、話題に挙げていたのは、本題である「和平」とは直接関係のない「第二次世界大戦中にユダヤ人虐殺を指揮したナチス・ドイツのSS将校アロイス・ブルナー（第二次大戦中、約10万人のユダヤ人をガス室に送り込んだ戦争犯罪に対するフランスの欠席裁判で1954年に死刑を言い渡されている）をシリアがダマスカスに匿っている」「シリアにはレバノン人を含め、2000人余りの政治犯が囚われている」とするユダヤ人団体や人権団体のクレームである。

それをそのまま垂れ流し、「シリアがいかに反人道的・反人権的な国でありフランスのパートナーにはなり得ない！」という論調で宣伝し、国際世論を煽った。

1999年5月4日がリミットである「和平」プロセスを米国、イスラエル、パレスチナ、アラブ諸国はどう進めようとしてきたのか？を米国の対中東政策を振り返りながら、最近の動向に焦点を当て、見ていきたい。

1. 米国の二股路線

「ピース・メーカー（PEACE MAKER）」という言葉が空々しく聞こえたマドリード和平会議で、アラブ諸国が初めてイスラエルと同じテーブルを囲んだのは、1991年10月であった。それは、東西冷戦構造が崩れ、米国・ブッシュ政権が「市場経済・複数政党制・民主主義」をかざしながら「新世界秩序」を以って、世界各地の支配構造の再編に奔走していた20世紀最後の10年の始まりだった。

93年8月にはオスロ秘密合意が結ばれ、9月には「原則宣言」が調印された。

それは、91年湾岸戦争で、対イラクの軍事作戦「砂漠の嵐」へ「多国籍軍」を編成し、そこに中東諸国を動員し始められたポスト湾岸戦争の米国の中東政策の本格的な展開としてもあった。

ブッシュ政権下の国務長官であるジェームズ・ベーカーは自身の回想録「シャトル外交 激動の四年」（新潮文庫）の中でこう述べている。

『…そしてこの機会を最もうまく利用する方法は、イスラエルが1948年に建国されて以来ずっとタブー視されてきた両者の直接対話を実現する方法を編み出すことだ、という結論に達した。…（中略）…主要スタッフで協議した結果、私たちは二つの路線で和平を進めることにした。まず、パレスチナ側の代表を誰にするのかという数ある問題の中でも最も困難な課題があることを承知の上で、イスラエルとパレスチナの直接対話に繋がるプロセスを再開することにした。同時に、私たちは二つ目の路線を提案する。アメリカとソ連が共同で主催し、当事国すべての代表を一堂に集めて中東和平会議という形でイスラエルとアラブ諸国が直接に対話する、という案である。』

この形式は、意図的に曖昧さを持たせた計画だった。アラブ側は、これが自分たちが長いこと求めてきた国際会議だ、と主張できる。イスラエルは、これは自分たちが40年間も待ち望んできた1対1の会談である、と反論できる。双方の当事者が参加した1973年のジュネーブ会議と大差はなく、イスラエルが終始一貫して抵抗してきた

国連の主導による国際会議を拡大したものでもない、と主張できる。』である。

ここにはっきりと、今日混迷を深める「和平」における米国の「正直な仲介者」としての立場ではなく、ダブル・スタンダードを常套手段とする偽善者の立場が告白されている。

2. 5月のロンドン会議の

失敗とその後

米国务長官オルブライトがアラファトとネタニヤフの直接会談には些事を投げ、米国とそれぞれとの分離会議のみに終始した5月ロンドンでのパレスチナ・イスラエルの「和平」会議では、辛うじてワシントン会議への招請を行い、米国のメンツを保つ形で終わった。

このロンドン会議の途上、カイロに立ち寄ったネタニヤフの訪問目的をエジプトの情報筋は、『ネタニヤフはパレスチナとの何ら合意するつもりはない。ロンドン行きは単なるジェスチャーに過ぎない。彼はエジプトに“レバノン・ファースト提案”（イスラエルは南部レバノンの占領地解放闘争をレバノン政府が押えれば、南部レバノンから撤退し、レバノンとの「和平」を結ぶ用意があるとするとする南部レバノンからのイスラエル軍の無条件即時撤退を求めた国連決議425に“条件を付ける”シリア・レバノン分離懐柔策で、シリア・レバノンは即座に拒否している）を販売することに忙しかったよ』と見え見えのパフォーマンスを嘲った。

アラブの老獪な人々には、ネタニヤフの真の狙いは最初から丸見えだったのだ。

一方、アラファトはロンドン会議前に公然と「米国提案である西岸の13.1%からのイスラエル軍撤退案に同意する。それ以下では受け入れられない」と語り、米国案に妥協に妥協を重ね、逆にネタニヤフにプレッシャーをかけた。

こうしたプレー前に自分の持ち札をテーブルの上に置いてしまうアラファトの手法がロンドン会議を葬り、更なる圧力をイスラエルにかけることになったと言われている。

だが、オスロ合意当初、イスラエル軍の撤退は西岸の40%を最初の2段階で行なうと合意されていたが、それが30%になり、ついには13%となったというパレスチナ側にとっては誠に苦い経緯がある。

このロンドン会議後、オルブライトの米国への招請に対し、ネタニヤフが出したワシントン会議に出向く条件は、①和平会議におけるEUの役割を明らかにすること ②パレスチナ政府のテロリスト組織に対する更なる弾圧 ③パレスチナが独立国家を宣言しないという誓約 ④占領地へのユダヤ人入植地の制限などに言及しないことであった。

結局、ワシントン会議はネタニヤフが米国の招請を拒否し、開催されずに終わり、今日までの混迷が続いている。

米国はこの間、何を以って「和平」を進めようとしていたのか？

3. イスラエル紙ハーレツが6月4日に 報じた米国仲介案

(12週間3段階撤退案)の内容

米国のデニス・ロスがパレスチナ・イスラエル両国に5月最終週に提示した提案の内容は、イスラエルに12週間で西岸の13%からの軍撤退を実行することや、ユダヤ人入植地の拡大を制限すること、すなわち、米国がイスラエルに対する制限を強調した内容が柱になっていると言われるが果たしてそうなのか？！

ハーレツの記事によれば、

第一段階は第一週から第5週まで、第二段階は第6週から第11週まで、第三段階は第12週とし、その内容を段階毎に定めているが、要点は、①イスラエルは現存するユダヤ人入植地の回りに新たに入植地を拡大しないし、入植地を結ぶバイパスをパレスチナ自治区に作る為にのみ1800戸のアラブ人住居を破壊しないことを合意した。

②暫定合意に沿って12週間の間に、パレスチナ人政治犯の釈放、ガザ空港・共同工業区の運営権を明け渡す。

③パレスチナ側は1999年5月4日に5年間のオスロ暫定合意が完了する前に、ガザ・西岸のいかなる地位変更も行なわない。国連においてイスラエルの信任に異議を訴えず、許可無しにイスラエル管理下の西岸に住居を建築しない。

④12週間の第三段階で、パレスチナ自治政府が全面的あるいは部分的に統治する西岸は27%から40%になるだろう。

、以上である。

ポイントは、今年11月の中間選挙への前哨戦がすでに開始されている米国がイスラエルにどれ位の圧力をかけた内容になっているのか？である。

表面的には、イスラエル軍の撤退期間を定めているように写るが、第一段階で『米・イスラエル・パレスチナの保安委員会が編成され、保安問題に当たる』とされており、「イスラエルの保安が確保されなければ、和平はない」という立場のネタニヤフに口実を与えるイスラエル寄りのものになっているのは歴然としている。

ハーレツ紙は、パレスチナ側がロンドン会議で更に譲歩し、「第二段階までは13%返還に拘らない」と合意したなどと、更なる妥協をパレスチナ側が行なったかの様なデマを流し、イスラエルが和平を妨げている事実を必死に覆い隠し、逆に和平を妨げているのは、パレスチナ側であると情宣した。

7月19日には5か月ぶりにエルサレムでパレスチナとイスラエルの直接交渉が再開されたが、これも「ネタニヤフの時間稼ぎのポーズ」であるとアラブ紙は一斉に書き立てていた。この直接交渉は、予想通り何の成果もなく終わった。

米国は7月22日、イスラエル側の要請である特使デニス・ロスの中東派遣を拒否している。

7月23日、アラファトはイスラエル連立与党議員メイヤ・シートリトと会談するなど、ネタニヤフ連立政権内部へ食い込み、揺さ振りをかけている。

『敵の敵は味方』か！！

では、イスラエル連立政権はこうした状況にどう対応しようとしているのか？

4. イスラエル政権内部の矛盾

極右政党や宗教政党との連立政権であり、基盤が弱いリクード党のネタニヤフ政権は、常に「撤退に合意すれば、政権は崩壊する」という圧力を受けながら「和平」交渉に嫌々、取り組んで来た。

6月末には、ネタニヤフはいち早く否定したが、イスラエル大統領ワイツマンが遅々として進展しない「和平」会議に業を煮やし、西岸からの撤退についての国民投票と、それが受け入れられない場合の早期の選挙を求め、メディアを通じた大統領と首相の「和平」に対する応酬に発展した。

ネタニヤフは「パレスチナ側がやるべきことを行なえば、和平合意は非常に近い」とイスラエルに責任は一切ないとする立場を強調し、予定通り、2000年に選挙を実行するとした。極右で知られるテルアビブ市長ロニ・ミロが次回の首相選挙に出馬するなど表明している。こうした弱体な基盤を、労働党との連合政権を編成し、乗り切るといっても労働党党首バラクとの間で6月初めに検討されたが、失敗に終わっている。

6月15日にはネタニヤフ政権に対する不信任案が国会に提出されたが、可決には120議員の内の過半数61以上が必要であり、賛成33で否決された。

割と安泰に見えるが、連立政権内の極右・宗教政党議員は退席し、不在であったことが、ネタニヤフの政権基盤の脆さ、「和平」への対応での矛盾の深さを表している。

ネタニヤフはこうした政権内部の矛盾を外に向け解決していこうとしている。

ハーレツ紙7がつ23日付によれば、イスラエル国会で『占領中のゴラン高原(1967年の中東戦争でイスラエルがシリアから奪取・占領した)をシリアに返還するには国民投票が必要である』という議案がTHE THIRD PARTYから提案され、22日に承認を受けたと言う。この議案の国会通過には過半数の61が必要だった。

賛成は65票で、UNITED TORAH党とJUDAISM党以外の全ての党から賛成票が投じられた。ちなみに労働党からは13票。一方、反対は31票で、MERETZ党・UNITED TORAH党・HADASH党・民主アラブ党・労働党などから反対票が投じられた。各党とも、党議拘束していなかったと見られる。

これに対してシリア紙アル・バースは7月23日、『これは地域・「和平」プロセスに対する戦争宣言であり、イスラエルは無条件にゴラン高原を撤退・返還せよ!』と強い調子で非難した。

では、アラブ諸国全体としての動きはどうか?

5. アラブ・サミットへの取り組み

イスラエルの「レバノン・ファースト提案」に際し、レバノン首相ハリリーは、アラブ諸国・EUを精力的に廻り、国連425決議の履行を求める政治攻勢に打って出た。また、インド・パキスタン核実験に際し、再び焦点化された中東唯一の核保有国・イスラエルのNPTへの加盟を求める動きなど何度か、アラブ諸国サミットの開催の気運は高まりを見せた。

が結局、アラブ諸国会議の開催にまでは今日まで至っていない。

7月21日ヨルダン・タイムスによれば、IAEA(国際原子力機関・ウィーン本部)にアラブ連盟として、『イスラエルが核査察に応じるまで、イスラエルに対する核開発の原料・開発関連物資

輸出をストップせよ!』と国際社会へ協力を求める決議書を送付したと言う。

「エルサレム拡大計画」に対する取り組みはエジプト・パレスチナ・ヨルダンによるカイロ・サミットが行われただけである。

すでにイスラエルとの経済関係が水面下で進行しており、ポスト「和平」の経済圏構想にアラブ各国は奔走しているのが現状だ。

湾岸戦争後の米国イニシアティブによる中東再編の動きに対し、米国との決定的な対立点を回避し、譲歩できる所は譲歩を重ね、EUとの結びつきを強化しながら、バランスをとっている。

一言で言えば、非米・EU依存の進路をとっていると言える。

6. 米国のユダヤ・ロビー

ワシントン会議への招請を断ったネタニヤフは予定通り5月に、AIPAC(米イスラエル公共問題委員会=親イスラエル・ロビーとして著名)の年次総会に出席し、演説している。

ネタニヤフは米政権内のユダヤ・ロビーに働きかけ、『クリントン政権がイスラエルへの政治圧力をかけ過ぎると、クリントン政権を危うくする!』と脅しをかけるのが目的だった。

これに呼応するように5月に行われたユダヤ人虐殺50周年祈念式に参列したギングリッジ下院議長(共和党)は「今やクリントン政権はアラファトと同様に反イスラエルになったのだ!」と露骨に、「和平」会議でイスラエルへの圧力をかけようとするクリントンを非難した。

歴史的に米国が、「人工国家」であるイスラエルを国家足り得るだけの国家的な財政援助を行なってきたことは、ジェームズ・ベーカーの「シャトル外交 激動の四年」にも明記されている。

『歴史的に言えば、アメリカはユダヤ人への祖国への移住を強く支持してきたし、我が国がイスラエルに対して毎年行ってきた財政援助の大半は、移民受け入れ計画の資金に充てられてきた。』

ヒラリーのスイスでの「パレスチナ国家樹立を支持する」という発言が物議を醸したが、これは米国政権内の「和平」会議を何とか軟着陸させて、ポスト「和平」の中東利権を安定させたいとする国際資本の声を忠実に代弁したものであり、イスラエルは何より米国からの圧力に最も神経を苛立たせている。

在レバノン・ 米大使館に ロケット砲攻撃！

1. イスラエルの撓乱か？！

6月18日、ベイルート郊外のダウラ(アルメニア人密集地)で車爆弾があり、2名が死亡した。死亡した2名はどちらも解散させられたレバニーズ・フォース(LF/マロン派右翼の民兵組織、すでに党首サミール・ジャジャは囚われており、非合法化・解散させられている)に属したものであり、なおかつその内の1人は爆弾専門家だったと治安当局は発表。

21日、東ベイルート・アンテリアスにある在レバノン・米大使館へのロケット砲攻撃があった。2発のロケット砲は米大使館から500mの地点に着弾。けが人などは無し。

22日、ダウラのガス・ステーション近くで20つの手榴弾が発見された。18日に車爆弾があった場所の近くであった。

これについて外相ファレス・ブエズは「これらの事件から読み取れるのは、レバノンに対してというよりも、米国に対しての非常に政治的なメッセージである。イスラエルが進めている「エルサレム拡大計画」などを覆い隠す為の仕業に間違いないだろう」と発表。

内相ミッシェル・ムールは、中央保安委員会(国家保安局・内務保安軍・レバノン軍で構成)が23日、会議を開き、この保安問題に対する対応を協議すると発表。

2. イスラエル・スパイ網を摘発！

レバノン軍情報部は、20人と推定されるスパイ網の内、11人を逮捕した。情報筋によると、彼らテロリスト・ネットワークは、最近の爆弾事件に関与し、レバノンの安定を脅かしていたと言う。

7月3日、国防相ダッラールは「詳細は近日中に発表されるだろうが、このテロリスト・ネットワークはイスラエルと非常に緊密な関係を持っていたことが明らかになっている」と発表。さらに続けて「これによりレバノン・ファースト提案」がいかに正直な提案でないかが明らかにされた」と締めくくった。

マスコミ報道された詳細な発表によれば、スパイ網はイスラエル軍情報部のユニット504により機能されており、レバノン人77人が関与している。すでに逮捕されているのはこの内の17名のみである。

この504部隊は1995年に結成され、以来イスラエルと国境を接するアラブ諸国での作戦に従事している。主要なターゲット活動地域はシリア・レバノンである。この部隊はイスラエル人を雇わず、作戦実行国のアラブ人をリクルートすることで編成されている。この部隊が公に話題に上ったのは5年前、ユセフという将校がシリアと米国の情報部に部隊の活動情報を与えたことにより、イスラエルで有罪判決を受けた時である。

数年前、レバノン軍情報部はイスラエルのモサドとレバニーズ・フォースにより組織されたスパイ網を摘発した。検事によれば、彼らスパイはイスラエルで見えないインクで文字を書く技術や情報収集法について訓練を受けたと言う。特に70年代後半と82年のレバノン侵攻前にレバニーズ・フォースなどからリクルートし、モサドが沿岸都市での訓練を施した歴史は確認されていると言う。そして特に最近、南部レバノンで神の党などからの攻撃でかなりの打撃を受けていることから、神の党他の組織への「潜入」を図っているのだと言う。

これらはレバノンで逮捕され、自白したスパイ(11通の見えないインクで書いた手紙をアテネに送付し、その見かえりに7300米ドルをイスラエルから受け取っていたレバノン人)の供述による

ものだとしている。逮捕された者の多くは「密通罪」で死刑か長期刑になる。なお、これらの逮捕は南レバノン傀儡軍の情報将校ラジャ・ワードが数週間前にレバノン軍の検問に投降したことに端を発しているが、具体的な捜査報告は軍事機密であるという理由で公表していない。(以上、7月9日付アラビック・ニュースより)

レバノン軍事法廷の軍事裁判では、「彼らがオーストラリアのレバニーズ・フォースのメンバーと共同し、更なる陰謀を企てていた。南レバノン傀儡軍から武器などを供与され、内務大臣ムールと電気資源大臣ホベイカの暗殺を企てていた」と警告した。(以上、7月10日付アラビック・ニュースより)

3. 国際赤十字委員会の仲介による 戦争捕虜・遺体の交換

6月25日、イスラエルにより占領されている南部レバノンの戦場で戦争捕虜になった解放闘争を闘うレバノン人と、イスラエル人の捕虜・遺体の交換が国際赤十字委員会の仲介で行われた。遺体の輸送にはフランスの飛行機が使われている。この交換は昨年9月7日からハリリ首相直接の指導の下、国際赤十字委員会が仲介し、行なっていた。遺体は神の党28人(神の党の指導者ナスラッラーの息子であるハディ・ナスラッラーも含まれている)、アマル9人、共産党3人である。戦争捕虜の交換は、26日に60人のレバノン人戦士がイスラエル内の収容所から釈放され、国際赤十字のバスに載せられ、行われる。

前回の大きな捕虜交換は96年7月だった。神の党の国会議員アマル・ムサウィは「神の党が捕虜と殉教者を取り戻せたことは、レバノン人全ての勝利である」とAFPのインタビューで語った。(以上、6月25日付けフューチャー・ニュースより)

アムネスティ・インターナショナルは「この捕虜交換は歓迎されるべき動きであるが、ヒアム収容所の21人のレバノン人を含む全ての捕虜をイスラエルが釈放・捕虜交換に応じなかったのは大変残念である」と語った。(6月30日付けのデイリー・スターより)

この捕虜交換が「レバノン・ファースト提案」の具体進展を狙ったネタニヤフの戦術ではないか? という論調もある。

南部レバノンでのイスラエルの攻撃は今も継続されている。

4. エジプトから米国へ強制連行

82年パンナム機爆破のパレスチナ人ラシッド・51歳が7月1日、16年間の米国の追求の果てに米国の裁判所に連行された。

モハメド・ラシッドは、1982年8月、成田からハワイに向けたパンナム航空機を爆破し、10代の日本人1名死亡・3名けがを負わせた。彼はパレスチナに生まれたが1948年に「イスラエル建国」時に追放されたと言う。

起訴状によると、彼はバクダットに本拠を置く5月15日というテロ組織のメンバーであり、パレスチナの大義を実行するという目的で、米国・イスラエルを対象に破壊活動を行なったとされている。終身刑が言い渡される可能性が強いと司法省スポークスマンは語った。

彼は、1988年ギリシャで偽造旅券行使罪で逮捕・勾留され、92年に18年の実刑を言い渡されている。その時、米国は彼の米国への送還をギリシャに求めたが、ギリシャ側は拒否し、71年に定められた「航空機に関するテロ行為に関しては逮捕された国で裁判を行なうという合意」に基づき、ギリシャで裁判を受けた。その後、15年に減刑されたが、模範囚として96年に釈放され、アテネからカイロに移っていた。1996年からエジプトの刑務所に収監されていた。

米当局は彼の逮捕状況を明らかにすることを拒否している。

彼は、「同じ罪に対して二度の裁判をされることは世界中のどの国でも有り得ない」と主張している。(以上、6月3日CNNニュースより)

**こうした米の違法な強制連行を
何とか出来ないものだろうか!!**

有難うございます！

広島県 Yさん
川崎市 Mさん
鳥取市 Nさん
足立区 Nさん
神奈川県 Hさん
長岡京市 Nさん
大阪市 Mさん

暑い夏がやってきました。皆さん体調を
崩たりしていませんか？

今回もたくさんのカンパありがとうございます。
毎月のように協力して下さる方、
個人で多額を負担して下さい下さる方、緑色の郵
便振替受け払い書類の入った封筒を受け取
ると、有り難いやら申し訳ないやら...

本当にありがとうございます！！

皆さんの気持ちに答えられるように頑張
りますのでこれからもよろしくお願いします

あと ￥2,138,166

会計報告

(98年7月20日現在 6/24~7/20迄)

収入

カンパ	¥256,700
購読料	¥15,000
会費	¥1,000
計	¥272,000

支出

切手代	¥48,000
コピー料	¥20,770
レバノン・差入れ送料	¥41,700
雑費	¥5,000
計	¥115,470

繰越金	¥704,541
収入	¥272,700
支出	¥115,470
繰越借入金	¥1,940,000
計	¥1,078,229

◆編集後記◆

7月18日、「東京拘置所のそばで死刑について考える会」主催「ビデオを見ながら死刑について考える集い」に参加しました。和室に座蒲団引いて、お茶菓子をボリボリ摘みながらという、和やかな雰囲気での始まりでした。上映されたビデオは94年に死刑執行されたAさんの犯罪、執行に至るまでの経緯を番組にしたものでした。(「女神の天秤」TBSで放送された。)これは、なぜこの様な犯罪が起きたのか、幼児体験、家庭問題が中心でした。両親がいなくて養子として迎えられ、家庭を感じたことがなかったAさんは殺人を犯し、「暖かい家庭が欲しかった。それ以上でも以下でもない」と話した。誰にでも可能性がありそうな身近な事件だと思いました。死刑確定後も捜見できるようボランティアグループのAさん夫妻は彼と養子縁組をしたが、東拘はそれを認めず、執行される日まで8年間、接見、手紙を拒否し続けた。Aさん夫妻はこの事を番組で伝えたかったのに本誌とずれるということでアピール出来なかった。(残念!!)放映後、周囲の反応は悪いものではなく、やっぱりTVの影響力は大きかったそうです。

そばの会2度目のビデオ会でしたが、今回も配ったピラを見てきてくれた人がいました。死刑について関心を持つ人がどんどん増えています!!ピラも配り甲斐がありますね。次回ピラ配りは8月22日(土)16:00~綾瀬駅前です。(HA)